

# 『指輪物語』における Christ Figure

—「死」と「復活」の観点から—

棚 瀬 江里哉

## 目 次

- I. 『指輪物語』における「死」
- II. ガンドルフ
- III. アラゴルン
- IV. フロド
- V. 『指輪物語』における Christ Figure

## I. 『指輪物語』における「死」

J. R. R. トールキンの作品とキリスト教を結びつけて論じた研究はもちろん存在したが、たとえば C. S. ルイスと比べれば目立つというほどではなかった。しかし映画の大ヒットもあり、『指輪物語』について語られること自体が多くなってきており、キリスト教との関連をテーマにするものも増えてきた。その中で、登場人物の中に Christ Figure を見て取ろうとするものがある。例を挙げれば、十字架にたとえられる指輪という重荷を背負ったフロド、再臨した王であるアラゴルン、死からよみがえったガンドルフ、などである。

しばしば言及されることだが、『指輪物語』という作品には死が多く出てくる。戦い、戦争を扱っているのである意味では当然かもしれない。重要人物としては旅の仲間の一人であるボロミアが挙げられる。また、ボロミアの父、 Gondor の執政デネソールはパランティアを両手で抱え自ら炎の中で死ぬ。かつての賢者白のサルーマンは最後に手下である

蛇の舌、グリマにのどを掻き切られる。

また、注目したいのは、実際の死にきわめて近づく瀕死、臨死もまた多いことである。 Gondor を守ろうとする必死の戦いの中でファラミア、エオウィン、メリーが相次いで倒れる。それもただの重傷ではない、死にきわめて近い状態に陥る。

興味深い例がローハン王セオデンである。初めて登場したときは杖をつきなびた老人であった。しかし実はグリマに操られていたのであり、ガンドルフのおかげで「新たに目覚めたもののよう」にされ、背はまっすぐになり、目は澄んだ。これなどは実際の死に近づいてはいなくても、いわば象徴的に死んでいたのが再生したものと考えてみたいと思う。ちなみに象徴的に復活したセオデンはローハン軍を率い、エオウィンとメリーが倒れた戦いで実際の死、栄誉の戦死を迎えることになる。

さて、ではガンドルフ、アラゴルン、フロドの主要登場人物たちは「死」（実際の死、臨死、象徴的死をすべて含めて）とどう関わっているのだろうか。そしてそれは Christ Figure とどう結びつくのか、という観点から『指輪物語』を検討してみたい。

## II. ガンドルフ

灰色のガンドルフは旅の仲間の指導者の人物であった。しかし、旅の初めの方、モリア

の坑道で恐るべき怪物バルログと相対し、他の仲間たちを逃してから一人でこれに立ち向かう。壮絶な戦いの末にバルログとともに奈落へ落ちて行き、死んだかと思われていたが、復活しふたたび仲間たちのもとへ現れる。以下は、バルログとともに落ちてからどのようなことが起きたのか、ガンダルフ自身が仲間たちに語ったことである。

「…わしは敵を投げ落とした。敵は高みから落ち、転落しながら山腹にぶつかり、ために山腹のその場所はこぼれた。次いで暗闇がわしを襲った。わしは思考からも時間からもさまよい出て、はるかな道を彷徨した。その道のことは話すまい。

裸のままわしは送り返された——ほんのしばしの間、わしの務めを仕終えるまでのことじゃ。そして裸のままわしは山の頂きに横たわってあった…」

(二つの塔 (上) 182-183)

注目すべき語句の1つが「時間からもさまよい出て」である。暗闇に襲われ思考からさまよい出ただけならば、眠り、気絶などもそうであろう。しかし時間からもさまよい出た、また、はるかな道を彷徨した、ということはそれらよりももっと根本的に深刻な事態を表しているとも考えられる。さらにまた、「わしは送り返された」も注目値する。受動態「送り返された」が用いられているということは、送り返した主体が存在することを示唆するからである。すなわち、この箇所からは、ガンダルフは一度死んだが何者かがよみがえらせ、ふたたびこの世に遣わしたということが読みとれるのである。いずれにしろ、物語全体の流れとしても、本人の話からも、死んで後復活したと解釈できる。

そしてこの復活したガンダルフは、かつての灰色のガンダルフから、より強力な白のガンダルフとなっていた。それはかつては後塵を拝したサルーマンをあっさりと打ち破り塔

に閉じ込めてしまったことに端的に表れている。また、反サウロン軍全体の指導者として活躍した。

そのあとアラゴルンは、王冠を自分の頭に戴かずに、ファラミアに返しましたので、多くの者はこれをいぶかりました。アラゴルンはいいました。「予は多数の方の苦心と勇気により王位を継承するにいたった。これを記念して、予は王冠を指輪所持者に予の許まで運んでもらい、もしやっていただけのものなら、ミスランディア殿の手でそれを予の頭に戴きたいと思う。と申すのは、ミスランディア殿こそ、ここに成就されたすべてのことを動かしてこられたお方だからだ。これはミスランディア殿の勝利である。

(王の帰還 (下) 149)

アラゴルンの戴冠の場面でアラゴルンが、成し遂げられたすべてのことを動かしてきたのはミスランディア (ガンダルフ) であり、これは彼の勝利であると明確に述べ、ガンダルフに栄光を帰している。

### III. アラゴルン

野伏たちのリーダーにして Gondor の真の王の血筋であるアラゴルンが、友国ローハンから窮地にある Gondor のために出発するとエオウィン姫に告げる場面がある。道を間違えているのではないかと問うエオウィンに対して、アラゴルンは「死者の道」を通るつもりだと答える。

「いや、姫よ、」と、かれはいいました。「わたしは道をまちがってはおりません。なぜならわたしはあなたがお生まれになってここを雅びになさる前にこの国を歩いているからです。この谷間から出ている道があるのです。そしてその道をわたしは行きます。明朝わたしは死者の道に馬を進めます。」

すると姫は恐怖に打たれた人のようにまじ

まじとかれを見つめました。顔からはすっかり血の気が引いて、しばらくの間口を利くことなく、その間みんなは黙然とすわっていました。「けれど、アラゴルン殿。」ようやく姫はいいました。「では死をお求めになることが、殿のご用向きなのですか？ なぜなら、その道で見いだされるものはそれしかないからでございます。生あるものは通してはもらえないのです。」

(王の帰還 (上) 81-82)

ここで一つ思い起こしたいのは、文化人類学、あるいは文芸批評において、人物が穴、特に暗い洞穴に入り込み、そこからまた外に出てくるのは、象徴的な死と再生のパターンの典型とされていることである。しかもアラゴルンの場合、洞穴の名称からして「死者の道」であり、さらにエオウィンによればその道で見出されるのは死のみであり、生あるものは通れない。アラゴルンが通るべき道と「死」が非常に強く結びつけられているのがわかる。しかし他のふつうの人間には不可能だったかもしれないことをアラゴルンはやり遂げる。

こうしてアラソルンの息子アラゴルン、イシルデュアの世継エレサールは死者の道を通り抜け、海からの風に運ばれて Gondor 王国にやってきたのです。ロヒリムたちの喜びはほとばしる笑いとなり、いっせいに打ち振る剣のひらめきとなりました。そして城中の喜びと驚きは喇叭の吹奏となり、打ち鳴らす鐘の響きとなりました…

(王の帰還 (上) 207)

かくして死の道を通り抜け、Gondor のピンチを一時的にしろ救う。

アラゴルンに関してもう一つ重要なポイントがある。彼はいやしの力を持つということである。上で触れた臨死状態のファラミアの手当を始めたとき、ファラミアは身動き一つせず、何の反応も示さず、息さえしているよ

うに見えなかった。それに対してアラゴルンは苦闘とも言えるような必死の手当を施す。

不意にファラミアは身動きして、目を開きました。そして自分の上にかがみこんでいるアラゴルンを見ました。するとその目に愛と認識の光が点じられました。そして彼は静かに口を利きました。「わが殿よ、殿はわたしをお呼びでした。まいりましたよ。王は何をご下命でしょう？」

「もう影の中を歩まず、目を覚まされよ！」とアラゴルンはいいました。「あなたは疲れておいでだ。しばらく休んで、それから食事を取り、わたしが戻ってきたら応じられますように。」

(王の帰還 (上) 242)

こうしてファラミアは救われたのだった。この直後にやはり瀕死のエオウィンとメリーを蘇生させ、さらには後にフロドとサムを蘇生させたのもアラゴルンだった。また Gondor 王として即位した後も「ものみなことごとくいやされ、よみがえり」と述べられている。

#### IV. フロド

サウロンの魔手からこの世(中つ国)を救うのに、指輪を滅ぼすという一番重い直接の責任を負っていたのはフロドだった。以下は責任を果たし、しかしもう生きる力はほとんど残っていないフロドとサムをグワイヒアが助けに来た場面である。

こうして荒天をついて舞ってきたグワイヒアは、大空の大きな危険を冒して空中を旋回しながら、遠目のきく鋭い目で二人の姿を見つけたしました。二つの小さな黒い姿は、寄るべなげに小さな丘の上に手をつなぎ合って、その足許では大地が震動し、口を開け、火の川が迫っていました。そして大鷲が二人を認めて、急降下してきたちょうどその時、

二人が倒れるのが見えました。弱り切ったのか、煙と熱に息がふさがれたのか、それとも遂に絶望に打ちのめされたのか、死を見るまいと目をおおいながら倒れたのです。

(王の帰還 (下) 115)

これも死にきわめて近い状況と言えよう。さらに、この場を助けられて後も瀕死の危ない状態は続いたのだが、アラゴルンによっていやされたのは前述のとおりである。

二人はやっと回復して全軍に披露されることになる。

そのあと [アラゴルン] は、サムを驚かせもし、すっかりまごつかせもしたことに、片膝をひいて、二人に敬意を表し、それから右手にフロドの手を取り、左手にサムの手を取って、二人を玉座に導き、そこに二人をすわらせると、居並ぶ兵士たち大将たちの方へ向き直って、口を開き、全軍勢に響き渡る声で叫びました。

「誉めよ、讃えよ、これなる二人を！」

(王の帰還 (下) 122)

この世を救ったものとして玉座に座りほめたたえられるのである。

## V. 『指輪物語』における Christ Figure

上で述べてきた『指輪物語』主要登場人物三人には共通点が見られる。それは一言で言うと、自らの死と復活が他者の救いと結びつく、ということである。なお、その「死と再生」は象徴的なものである場合もある。この三人は死の危険を冒すこと、大変な苦難に遭うことを自ら受け入れ、仲間、あるいはこの世を救うために行動し、そのために「死ぬ」が復活し、仲間、この世は救われる。さらには本人は大きな栄光を明らかにされる。すなわち、死と復活による救いをもたらす存在という、キリスト教の根本にあるイエス像が主

要登場人物たちに見て取ることができる。これは無論作者トールキンが敬虔なキリスト教徒であったことと無関係ではないであろう。ただしこの類の議論の際に必ず注意をうながされることがある。

この物語には隠された意味とか「メッセージ」とかが含まれているのではないかという意見に対しては、作者の意図としては何もないと申しあげよう。これは寓意的なものでもなく、今日的な問題を扱ったものでもない…わたしには「適応性」と「寓意」とを混同しているむきが多いように思われるのだが、一方は読者の自由な読み方に任せられ、他方は著者の意図的な支配に委ねられるものである。

(王の帰還 (下) 392, 393)

トールキン自身が前書きにおいて作品の持つメッセージやアレゴリを否定しているわけである。しかしまた、ある手紙ではトールキンは『指輪物語』はキリスト教的、カトリック的な作品であるとも述べている。すなわち、キリスト教的な読みが作者の意図によるただ一つの読みではないにしろ、いわばトールキンの身にしみこんでいたキリスト教信仰が登場人物たちにもある意味で投影され、主要人物が三人とも Christ Figure と呼ぶにふさわしいものになったと思われる。

### [付記]

- ・本稿は日本キリスト教文学会 2005 年度第 34 回全国大会における口頭発表「『指輪物語』における〈イエス像〉」をもとに構成したものである。
- ・引用はすべて評論社版『指輪物語』瀬田貞二訳による。分冊タイトルとページ数を示した。

[Abstract]

Christ Figures in *The Lord of the Rings*:  
Patterns of Death and Resurrection

Eriya TANASE

There are many instances of death in *The Lord of the Rings*. Boromir, Denethor, and Saruman are some of the important characters who died. There are also many near-deaths. Eowyn, Merry, Faramir, and many others came very close to being killed. There are also some people who can be considered to be symbolically dead. King Theoden, when he was manipulated by Glim, was such a figure, until revived by Gandalf. How are the three main characters, Gandalf, Aragorn, and Frodo, related to death in this work? And how can they be connected to the Christ Figure? These are the main points discussed in this paper, and it is shown that all three of them experience some kind of “death,” then are brought to life again. Also significant is the fact that, in the process, they save other people’s lives. Thus, all three main characters can truly be called Christ Figures, bringing about redemption through their own death and resurrection.